第11回作業科学セミナー 佐藤剛記念講演

作業科学の系譜と今後の発展

宮前　珠子
聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部

はじめに

今回この講演に当たって，私が作った作業科学の系譜を図１に示す．多少わかりにくいかもしれないがざっと説明すると次のようになる．まず中央の横線に沿って書かれたものは，米国ないし作業科学を始めた南カリフォルニア大学（以下USC: University of Southern California)の歴史を示すもの，一番上の線に沿って書いたものは日本で行われてきた作業科学セミナー関連の歴史，上から二番目の線に沿って書いたものは日本の作業科学関連の大学と大学院，下から二番目の線に沿って書いたものは，国際的動き，一番下の線に沿って書いたものは作業療法関連の主だった本と出版年である．

さて，作業科学は1989年にUSCで始まったが，この伏線としてG.Kielhofnerによる1977年の論文「アメリカ作業療法の60年」があるのではないかと思う．少なくとも私はこの論文（山田孝訳）を読んで，作業療法の世界で起こってきたこと，起こっていることを構造的に多面的に理解できるようになった．そこでこの講演は，G.Kielhofnerによるこの論文の解説から始めたい．

G.Kielhofnerによる「米国OT 60年の歴史」から作業科学まで

前述のように，作業療法の歴史を構造的に，系統的に見る見方を最初に示したのは，Kielhofnerであった．Kielhofner（1977）はこの論文の中で，トーマス・クーン（1962）が提唱した「パラダイム」という概念を用いてアメリカ合衆国作業療法の歴史を分析した．トーマス・クーンは，大学で科学史を教えるに当たって科学の歴史をレビューし，それまで知識というものは蓄積されて増大の一途を辿ると考えられていたが，そうではなく，ある期間主流を占める考え方が隆盛を極める時期（パラダイム期）と，それが否定され新たな様々な考えが競合する時期（危機期），そしてまた新たな中心的考え方が勢力を得る時期（新パラダイム期）というように，知識の発達には周期的変化が起こるということを発見した．Kielohofnerはこの概念を米国作業療法の歴史に適用したのである．

Kielhofner（1977)によれば，米国で作業療法の萌芽である「道徳療法」が行われていた18ないし19世紀は「前パラダイム期」，アメリカ作業療法士協会の前身である全国作業療法推進協会ができた1917年からしばらく（1920年代から1930年代)は「作業パラダイム期」，それが科学的ではないと批判を浴びて新たな模索が始まった時期（1940年代）は「危機期」，還元主義的な考え方が主流を占めるようになった新たなパラダイム期（1950～1960年代）は「還元主義（=機械論的，=医学的）パラダイム」とされ，1970年代は再び「危機期」となっている．そして次にくる新たなパラダイムは，作業パラダイムと還元主義パラダイムが統合される「統合パラダイム」の時代であろうと予測している．Kielhofnerによってもたらされた「作業パラダイム（モデル)」と「医学的パラダイム（モデル)」の明確な対比が「作業への焦点」という考えを鮮明に浮き上がらせ，現代において作業に再び注目することをクローズアップさせたのではないかと考えられる．

前述のように，1917年に米国ＯＴ協会の前身である「全国作業療法推進協会」が設立されているが，その目的の中には「to advance "occupation as a therapeutic measure", study...the effects of occupation upon the human being" and disseminate "scientific knowledge of this subject"：作業を治療方法として発展させ，人間への作業の効果を研究し，このテーマに関する科学的知識を広める」と述べられている．この考えが歴史あるUSCの中で，Reilly，Kielhofner，Yerxa，Clarkと継承され，1989年の「作業科学」という社会科学の一学問を打ち立てようとする意志へと発展したのではないかと私には思われる．

作業療法のパラダイムと対象者，理論，出版物

さて，ここで，先に述べたパラダイム期とそれぞれの時期の作業療法の主要な対象者を見ると図2のようになる．また，それぞれの時期に発展あるいは利用されてきた理論をパラダイムに当てはめて考えると図3のように

1960　1970　1980　1990　2000　2010

日本

★佐藤剛('02)
学会 GK '91
札幌('03まで) '95 ① '98 ②③④
三浜大 倉 原松阪 敷 '03'04 ★'07 ⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪

OSセミナー

OT学会OSセミナー
'02より

札幌講演★ Clark（訳） Zemke Clark Wilcock Zemke
'92 '96 '98
'02 ① '04 ② '06JSOS★ ③
広島小倉長野
'04 '05'06 '07'08

1963
東京病院 リハ学

広島 4大
広大 OBS M 16
広大 OBS Dr 7
札幌 OS M 6
吉備 聖隷 M 1 D 1 M 6 (D)
県広島 茨城 OS D 3 M 4 M 2

USC

USC OS Symposium '89 ①②
③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫
'07 ⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲

米国:全国ＯＴ推進協会

1917 : to advance "occupation as a therapeutic measure," "study … the effects of occupation upon the human being," and disseminate "scientific knowledge of this subject."

1962 Reilly.OB （1977退職）
1976 ★Kielhofner 米国OT60年
1985 Kielhofner MOHO
1989 ★OS Clark Yerxa

作業の形態/機能/意味の研究
基礎社会科学の一分野
心理学が行動に 社会学が 社会組織に 文化人類学が文化に焦点を当てるように
作業科学は作業に焦点を当てる

WHO　ｱﾙﾏｱﾀ宣言 1978　オタワ憲章 1986

国際

International Society of Occupational Scientists '99 ①
'06 '07 ―――→ OSThinkTank

本

'63　'71　'78　'81　'83　'85　'88　'92 '93 '96 '97 '98 '99

SSO:USA Canada Aus.Nz
A.Wilcock JOS
'02 ① ―――→Clark講演★ '05
'01 '00 W&S★ 10th.Ch2 （吉川）
'02 **'03** '04 '08

（訳本出版年）

W&S OT ('65)
W&S ('75)
原/鈴木 OT各論
Pedr ('85) ('96)
W S 6版 ('89)
MOHO ('90)
Miller ('94)
GK 理論 ('93)
COPM ('98)
OS ★ ('99)
EO ('00)
M.L. ('00)
Li St Re de sign
Meaning of everyday Occup.
Occup.by design
Introduction to occupation
Hasselkus
Pierce
Christiansen &Townsend

OT 協会：OT 全書――――――
'00:Cl.ﾐﾔ対談（訳）★ →

図1　作業科学の系譜

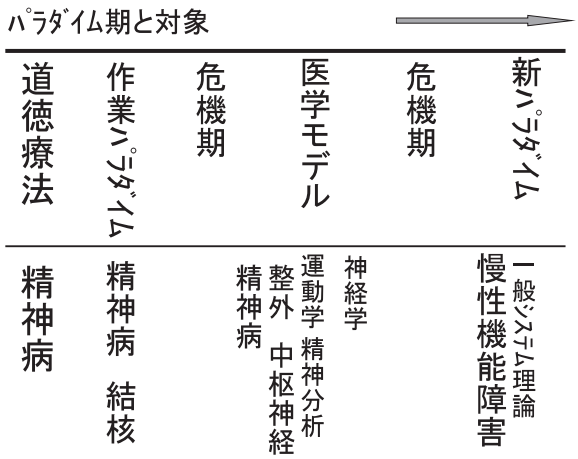

図2　作業療法パラダイムと対象

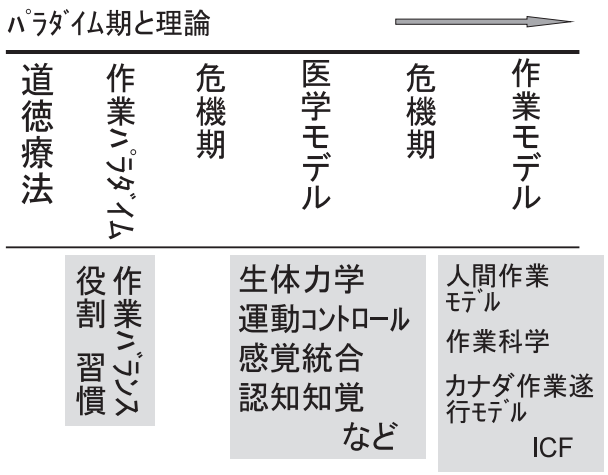

図3　作業療法パラダイムと理論

1960	70	80	90	2000
62 Brunnstrom Clinical Kinesi.	70 Brunnstrom Mov.Ther.hemi.	81 Pedretti OT practice	90 Kielhofner 人間作業モデル 訳	
65 Krusen リハ体系	70 Bobath Adult Hemi.	81 Dellon Eval.of Sensibility	90 OT協会 作業療法概論	
66 Rusk リハ医学 訳	72 Ayres SI 72 Malick :Splint	82 Melvin リウマチ疾患 訳	91 OT協会 作業療法評価学	
69 上田 目で見るリハ	73 Daniels(原著1946) 徒手筋力検査法訳	82 Eggers Ergotherapie Hemi.	92 Kielhofner Concep.found.of OT	
69 Brunnstrom 臨床運動学 訳	74 服部 他 リハ技術全書 74 Krusen リハ体系訳 作業その治療的応用	83 Trombly 2版 85 OT協会	92 Bobath片麻痺の評価と治療 3版訳	
	75 Knott & Voss PNF 訳	85 Pedretti 訳 85 Davis Steps to follow	93 Kielhofner 作業療法の理論 訳	

1960	70	80	90	2000
	76 中村 斉藤 基礎運動学	85 kielhofner A model of human	94 Miller OT6つの理論訳	
	77 Trombly OT for Phys.Dis..	occupation	95 OT協会 身体障害作業治療学	
	77 Melvin Rheumatic disease.	86 Eggers 片麻痺のOT訳	95 Trombly 4版	
	78 原＆鈴木 作業療法各論	86 津山 上田 標準リハ医学	96 Pedretti 4版 訳 96 Zemke OS★	
	78 Hunter Rehab.of the hand.	88 Miller 6 theories	97 COTA Enabling Occupation	
	78 Ayres: 訳	89 Trombly 3版	98 Law Client Centered Occupation	
	78 土屋:日常生活動作 79 上田:目で見るCVAリハ			
			99 Zemke OS訳	
			00 COTA Enabling Occupation訳	
			00 Law Client Centered Occupation訳	

Willard & Spackman: 1947,1954,1963,1971,1978,1983,1988,1993

'96-1-28 T.Miyamae

表1　1960年代以降の主要な書籍

なる．更に，我が国にリハビリテーションが浸透し始めた1960年代以降の主要な出版物（私の目に触れた主要な単行本）をリストアップすると次の表1のようになる．

これらの図表から，パラダイム変化の背景には，対象者の変化があること，対象者の変化に伴って新しい理論が誕生し，利用されていることがわかる．

一方，表１に示した書籍と年代を見ると，1960～70年代は医学的あるいは医学モデルの本が使われ，80年代半ばになって作業モデルの本が出版されはじめ，90年代以降相次いで作業モデルの書籍が出版されるようになった．

即ち「作業科学」の誕生は，米国の「全国作業療法推進協会」，作業療法の対象者の変遷，対象者の変遷に伴う理論の誕生，学問的確立を目指す気運の高まりが結実した結果であろうと考えられる．

作業科学の誕生と作業モデル，作業科学の我が国への拡がり－佐藤剛氏の働き

作業科学は1989年に南カリフォルニア大学大学院の研究領域として誕生したが，F.Clark（2000）が述べているように，当初作業科学は「作業の形態，機能，意味を研究するもので，基礎社会科学領域の一つの学問であり，心理学が行動に，社会学が社会組織に，文化人類学が文化に焦点を当てるように，作業科学は作業に焦点を当てるものと位置づけられる」とされた．しかし1993年になり，作業科学は基礎科学であると同時に応用科学でもあるという考えに変更されている．

ところで，我が国に作業科学及び作業モデルを導入するのに最大の貢献をしたのは，佐藤剛氏であった．

佐藤剛氏は，1991年第25回日本作業療法学会長として，Kielhofnerを札幌へ特別講演に招き，作業モデルを我が国に紹介する大きな契機を作った．この講演は，1993年に「作業療法の理論」として翻訳（山田孝）された著書の原稿であったと言われる．これをきっかけに日本作業行動研究会が発足し山田孝会長のリーダーシップの元に人間作業モデルの講習会・研修会が各地で開かれるようになった．

更に佐藤剛氏は，1995年の日本作業療法士協会全国研修会の会長として，USCのFlorence Clarkを講演に招き，同時に第１回の作業科学セミナーを札幌医大で開催した．1998年には第2回を行い，その後2002年の第6回作業科学セミナーまで毎年佐藤剛氏の主催により札幌で開催されていたが，2002年12月の氏の急逝により，2004年の第8回から持ち回りで各地を移動することになった．佐藤剛氏は当時日本作業療法士協会の副会長でもあり，氏の国際性と卓越した視点が協会の舵取りに大きな影響を与えるものであっただけに我が国OTにとって大きな損失であったと言わざるを得ない．

佐藤剛氏が企画した上記の米国を代表する２人の理論家の招待とその後に続く研修会，研究会活動がきっかけとなり，更にそれをサポートするものとして多くの作業モデル関係の書籍が翻訳されたことが我が国に作業モデルを広めるきっかけになり推進力となった．次にこれらの書籍を示す．1990年「人間作業モデル」(Kielhofner：山田孝監訳)，1993年「作業療法の理論」(Kielhofner：山田孝他訳)，1998年「カナダ作業遂行測定」(M.Law：吉川ひろみ他訳)，1999年「作業科学」(R.Zemke：佐藤剛監訳)，2000年「作業療法の視点」(カナダ作業療法士協会：吉川ひろみ監訳)，同年「クライエント中心の作業療法」(M.Law：宮前他監訳)など．

一方，1996年には作業療法課程を含む我が国初の大学院修士課程，1998年には博士後期課程が広島大学に創設され，作業行動科学研究室（宮前珠子主宰）が誕生し，作業の意味を問う研究が始まり，また，1998年には札幌医大に修士課程作業科学専攻が，2000年には博士後期課程が誕生している．その後も引き続き，吉備国際大学，県立広島大学，聖隷クリストファー大学，茨城県立医療大学に作業科学専攻を標榜する大学院，修士／博士課程が誕生し，これらの研究室から，2007年12月までに，25名の修士号取得者と10名の博士号取得者が出た．

これらの論文の多くは，作業科学セミナーで発表され，作業科学セミナーに多くの参加者を引きつける要因となり，札幌では20～30名の参加者だったものが，年々増え続け現在では200名を越えるようになった．

外国における作業科学の年譜

図１に示したように，USCでは1989年に第１回の作業科学シンポジウムが開催され以後毎年行われ，2007年には19回を数えている．1999年には国際作業科学研究会が誕生し，2007年に広く世界各国のメンバーを集結する組織に発展し，現在はオーストラリアのA.Wicks氏が会長をしている．米国作業科学研究会は2002年に始まり，以後毎年学術集会がもたれている．このほか，オーストラリア及びニュージーランドでは2000年から合同で年一回の学術集会を行い，カナダでも2001年から行っている．このほかヨーロッパ連合からも作業科学セミナーの案内が届くようになっている．

以上，駆け足で作業科学の歴史を振り返った．次に作業科学の未来を展望する．ここで未来を展望するに当たっては，2005年にF.Clarkが，アメリカ作業科学研究会の記念講演として行った「作業科学の未来についての私の思い」を枠組みとして拝借することとした．

F.Clark「作業科学の未来についての私の思い」要約

1989年に作業科学が誕生して2005年で16年になる．これまで作業科学は注目すべき成功を収めてきたが，引き続き反映するためには時代と環境の変化に反応し続けなければならない．今回は，現在，その未来が危機に瀕している「社会学」と「地理学」の窮状に基づいて作業科学の健康状態を査定する．

社会学は概念指向ではなく改革指向で学問が行われてきたこと，その中から多くの副専門が分化したことなどにより，入学者の減少，歳入と研究資金の減少を来している．地理学は，学際的交流に欠けること，自然地理学と社会地理学の2派に分裂して互いに敵意を持っていることが学問全体を弱体化させ，また，環境学などの関連分野の発展が歳入縮小，学部学生の減少や定員削減などをもたらした．

学問が存続するために必要なのは，「知的バイタリティ」，「学部生と院生の両方を惹きつけること」，そして「公的，私的両面から価値あるものと捉えられていること」である．

作業科学の健康度を，「知的生存」「学生を惹きつける能力」「肯定的政治状況」の側面から検討すると次のようである．「知的バイタリティ」は，おおよそ良

い状況である．今後作業科学者のアイデンティティを保ちつつ学際的な活動をする必要がある．「学生を惹きつけているか」について，USCでは，作業科学を標榜してから大幅に志願者が増え，予算も大幅に増加した．しかし教員は教育と研究に消耗しており，この問題を解決するため外部の研究資金を豊富にして，作業科学者を教育から解放して研究できるようにする必要があり，そのようにしている．

今後作業科学が発展存続するためには，作業科学研究の結果が作業療法に生かされ，それによって作業療法の需要が高まり，そのことが学生を作業療法領域に惹きつけ，それによって授業料収入をもたらし，資金が研究に提供されるという再生産サイクルが回転し続けることが必要である．

我が国の作業科学の健康度

知的バイタリティ，学生を惹きつける能力，財政基盤，政治状況から我が国の作業科学の健康度について考えてみたい．

知的バイタリティ：作業科学セミナー参加者から見れば，ここ数年増加の一途をたどっており，バイタリティは感じられるが，「知的バイタリティ」と言い切れるかどうかは疑問である．

学生を惹きつける能力：作業療法の学校数，学生定員は増えているが，応募者数は減少しつつある．一方大学院では「作業科学」を標榜する専攻が増え，一定程度の学生を集めている．

財政基盤：入学希望者が減少していることが感じられ財政基盤が豊かであるとは言えない．

政治力：弱い．

作業科学を日本で発展させるために何をなすべきか

このことを考えるとき，まず思い浮かぶのは，「作業科学」という言葉は浸透してきたが，その内容についてはさほど理解されていないのではないかということである．その大きな理由は，基本的なテキストが日本語に訳されていないということが考えられる．単行本で訳されているのは現在のところ1999年に翻訳出版された「作業科学」のみであり，その後に出版されている作業科学関連の単行本やテキストは全く訳されていない．また，作業科学とは何かを語る学術論文もほとんど学術雑誌に見られない．そこで私は標記のテーマを実現するために次のことを提案し，この講演を締めくくりたい．

１．作業科学の代表的単行本，テキストの翻訳

２．作業科学の代表的学術論文の和訳

３．日本の作業科学論文を集積する：これまでに発表されたものを「作業科学研究」に再録する．また，作業科学セミナーで発表されたものを論文にして学術雑誌に発表するよう促す．

４．我が国の健康政策などの理解を深め，全体を視野に入れて動く：オタワ憲章，ヘルスプロモーション，健康21などの理解

文献

1) Kielhofner, G. & Burke, J.: Occupational therapy after 60 years. Amer J Occup, 31(10): 675-689, 1977.
（山田孝訳：アメリカにおける作業療法の60年．作業行動と人間作業のモデル．241-269）
2) トーマス・クーン：科学革命の構造. みすず書房，1971.（原著1962）
3) Clark, F. A.，宮前珠子：作業的存在としての人間を研究する作業科学．作業療法ジャーナル，34(12）:1157-1163，2000.
4) Kielhofner, G.（山田孝他訳）：作業療法の理論．三輪書店，1993.
5) Kielhofner, G.（山田孝他訳）：人間作業モデル．協同医書出版，1990.
6) Law, M（吉川ひろみ他訳）：カナダ作業遂行測定．大学教育出版，1998.
7) Zemke, R.（佐藤剛監訳）：作業科学．三輪書店，1999.
8) カナダ作業療法士協会（吉川ひろみ監訳）：作業療法の視点．大学教育出版，2000.
9) Law, M.（宮前珠子他監訳）：クライエント中心の作業療法．協同医書出版，2000.
10) Clark, F. A.：One person's thoughts on the future of occupational science. Journal of Occupational Science, 13(3): 67-179, 2006.